

文化・経済フォーラム滋賀

# 提 言

平成30年2月18日

## これまでの提言

平成29年

世界遺産、無形文化遺産、世界農業遺産の登録等への取組みを  
～地域の文化遺産を見直し、グローバルな評価へ～

平成28年

新生美術館計画の実現と滋賀の魅力の発見・発信へ

平成27年

自然・歴史・暮らしが統合された地「近江」の発信を  
～“近江遺産” “近江八百八景” から日本遺産そして世界遺産へ～

平成26年

滋賀の文化を発信する国民文化祭を早期に、スポーツイベントと連携した  
開催へ

平成25年

文化・芸術・ビジネスの見本市としての国民文化祭へ

平成24年

文化ビジネスの開発で滋賀の文化と経済に新展開を

## ～地域文化を育む、新たな観光を創造する～

はじめに～提言に向けて考えたこと

- ・地域から観光をとらえ直す
- ・交流、対話としての観光
- ・地域の価値を照らす観光、という視点

「観光立国」がうたわれ、訪日外国人を含め観光客の誘致競争が各地で繰り広げられています。経済効果や地域振興を期待してのことですが、効果は東京や大阪、京都など特定の地域に限られています。観光客が押し寄せることで地域生活に支障をきたし、固有の文化を損ないかねない事態もみられます。

そこで、わたしたちは立ち止まり、そもそも観光とは何か、地域にとって観光はどうあるべきか、考えることにしました。

滋賀は古代からの長い歴史、多くの貴重な文化財を誇るだけでなく、地域には古くから伝わる祭りやオコナイ、なりわいといった生活文化が今も残り、琵琶湖を臨む美しい景観に恵まれています。

作家の司馬遼太郎氏や白洲正子氏を魅了した、この湖国の姿を、わたしたちは「宝物」として大切にし、後世に継がなければなりません。そうしたことに寄与する観光のあり方を考えたいのです。

観光は、確かに気楽な物見遊山であり、日常から解放されたひとときの喜びです。もちろん大切な体験ですが、それだけにとどまらない意義があります。

対話と交流としての観光です。他県や海外から訪れた人との交流、対話は刺激となり、互いに理解を深め、知見を広めることとなります。なによりも、見過ごしていた価値への気づきを、わたしたちにもたらしてくれる。そうした契機となることを、新しい観光に期待したいのです。

地域の風景、祭りはわたしたちの思い出とともにあり、そうした記憶をよりどころに、わたしたちは生活を営んでいるのではないのでしょうか。地域は長い年月の記憶を宿し、祭りや伝承によって呼び覚まされます。わたしたちは祭りや伝承をよすがに地域の記憶に触れるのです。文化は地域の記憶の宝蔵庫であると同時に、わたしたちを支えるアイデンティティとあっていいでしょう。地域の文化を失い、風景が破壊されることなど、わたしたちには耐えがたいことです。

観光を地域から見つめ直し、新たな観光に挑戦していくことは、とても意味があると思います。

## わたしたちの提言 1 ～地域に立脚して

- ・ 地域文化を育む観光
- ・ 地域にメリットが還元される観光
- ・ 地域文化を守るための持続可能な観光
- ・ 住民が主導、参加する観光
- ・ まちづくりにつながる観光

観光のあり方はいろいろあるでしょうが、わたしたちは地域に立脚した視点から、新たな観光の姿を示し、次のように提言します。

### #わたしたちが望むのは、地域の文化を育む観光です

地域の文化とは、文化財だけでなく祭りや伝承、行事、寄り合い、生業（なりわい）、生活、住民の意識を含め、広くとらえています。

観光は、訪れる人との交流、対話を通じて、こうした地域の価値を再認識し、地域への愛着や誇りを見い出すものであってほしいと考えます。

### #地域にメリットが還元される観光

観光産業だけが潤う観光では困ります。地域に相応の利益や雇用をもたらす仕組みが必要です。

### #地域の文化を守るための持続可能な観光

過度に利潤を追求するのではなく、地域の実情に見合った利益を得て、その利益は文化を守り、後世に継承するのに使います。

### #住民が主導し、参加する観光

こうした観光を実現するためには、観光産業にすべてを委ねるのではなく、住民主導、住民参加が不可欠です。地域の文化を外部に開きながら、文化の価値を損ねないように配慮できるのは、住民しかないからです。

### #まちづくりにつながる観光

観光によって地域の価値を見出し、地域のまちづくりにつなげていきたいものです。観光を契機に地域の良さを磨くことで、UターンやIターンの人たちが、潤いのあるまちづくりに参加するようになれば、どんなに素晴らしいことでしょう。

## 提言に至るまで～シンポジウムで考えたこと

- ・観光の概念を変える
- ・生活の場で文化が会う観光
- ・「観光地化」しない、新しい観光
- ・すでに新しい観光は芽生えている

提言を考えるにあたって、わたしたちは議論の場を設けました。2017年12月24日、ピアザ淡海で開いたシンポジウム「地域文化をはぐくむ観光とは」で、刺激的な基調講演、報告、討論があり、この提言の土台となりました。

基調講演とパネル討論に参加した（一社）ノオトの金野幸雄さんは、兵庫県篠山市での実践を踏まえ、観光の概念を変えないといけないと問題提起しました。

限界集落といわれる「集落丸山」で住民と連携した事業組合をつくり、古民家を再生して農家民泊を始めました。注目したいのは、宿の運営を住民たちが担っていることです。

1組1棟貸しで宿泊料金は高めですが、海外からも宿泊に訪れます。周囲は山林と狭い農地のほか「何もない」のですが、地域の作物と美しい夜空、住民のもてなしがインターネットで伝わって、運営は順調です。古民家再生の農家民宿は3棟に増やす予定で、空き屋は解消、耕作放棄地もなくなりました。

金野さんは「集落の人たちと幸せな関係を築いて帰ってもらおう。観光バスで名所旧跡を訪ねるのではなく、生活の場で文化と観光が会う、幸せづくりをしている」と話しました。

観光とは何かと考え、里山の人たちが安易な観光化を求めていることから導かれた、新しい観光の姿だということです。

パネリストとして参加した高島市の針江生水の郷委員会会長の三宅進さんは、湧水を暮らしに活かした「川端」に大勢の見物客が訪れるようになったのを受けて、あえて「観光地化しない」方針を地域で決めたことを説明しました。

訪問者の受け入れを、窓口の一元化、高めの案内料で制限、選別することで、観光ではなく環境を学ぶ場にしています。住民が訪問者を案内することで対話が生まれ、互いに地域を見直すことにつながっています。観光地化しないと宣言しましたが、新しい観光のあり方を示していると言っていいでしょう。

同じくパネリストのとよさと快蔵プロジェクトの宮崎瑛圭さんは、滋賀県立大生のころから学生仲間と古民家再生を続け、住民との交流や観光イベントにも参加しています。住民と連携した活動は、観光だけでなくまちづくりにも寄与しています。

びわこビジターズビューロー国内誘客部の林俊介さんは観光振興の立場から、琵琶湖を自転車で1周する「ビワイチ」と地域の交流を深める課題をあげました。自転車で疾走するのではなく、ゆっくり走り、滞在・宿泊してもらおう仕掛けづくりが必要では、といった議論に広がりました。

すでに、新しい観光の動きが始まっていることが、シンポジウムで分かりました。その可能性を広めていくにはどうすればいいのか、考えていくことが大切だと確認しました。

## わたしたちの提言2 ～実現への手法

- ・ 地域と連携する中間組織が重要な役割
- ・ 地域の価値を見い出せる人材の育成

### #中間組織をつくる

住民主導、住民参加といっても、住民には経験やノウハウがありません。なんらかのサポートが必要です。住民・地域と観光業、行政の間に立って、両者を結びつける中間的な組織をつくることを提言します。

中間組織はあくまで住民の意向に基づいて活動します。

住民と学び合って、地域の特性や価値を見つける。住民とともに地域にふさわしい観光のあり方を見い出す。これがスタートです。

地域にふさわしい観光の実現に向けては、専門知識と経験、ノウハウを有する中間組織の役割が鍵を握ります。中間組織は戦略を構築し、戦略に合致する観光や建築など各種業者、人材を選択し、行政とも連携して協力関係をつくります。資金確保や持続可能な経営を、金融機関やNPO、行政、市民など多方面の協力を得て確立しないといけません。

### #人材育成とスカウティング

中間組織を担う人材が重要です。

地域の価値を見い出せる専門知識のある目利きであるだけでなく、コミュニケーション能力が高い人材が求められます。住民との協議や関係者団体への協力要請などで欠かせないスキルです。

こうした人材は不足しており、公的に育成することが観光全体にとっても今後重要になるでしょう。価値ある歴史的建造物を発掘し、保存の道筋をつける「ヘリテージマネージャー」の養成講座は各地にあります。建物に限らず文化全体に関わる文化マネージャーを育成していく必要があります。行政が率先して担ってほしいところです。

中間組織の中核を担うのは、経験や人脈、経営ノウハウを兼ね備えた人材であることが期待されます。しかし、すぐに育成できるものではなく、スカウトすることも考えないといけません。

## 観光をめぐる動き

- ・多様化する観光
- ・観光政策の大きな転換→文化の保護から活用へ、経済優先でいいのか
- ・国連の「持続可能な観光」

21世紀に入り、日本の観光政策が大きく転換しました。2003年に小泉政権は「観光立国」を打ち出し、06年には観光立国推進基本法が成立、09年に観光庁発足、16年には安倍政権が「観光ビジョン」を掲げました。

観光ビジョンは2020年に訪日外国人4000万人の目標を掲げ、観光を基幹産業と位置付け、国際競争力を高めることを要請しています。ここで重要なのは、文化を保護するだけでなく、活用を求めたことで、大きな転換をはかっています。

国会に提出予定の文化財保護改正法案は文化財の活用をうたっています。文化財を守るだけでなく、広く国民の目にふれるようにするのは、確かに喜ばしいことです。ただ、専門家からは心配する声も上がっています。国宝や重要文化財は適切な保護環境が欠かせず、むやみに公開を拡大すれば致命的に劣化しかねない、というのです。

国宝級に限らず、文化の保存と公開のバランスをどうとるのか、専門家の目が必要となります。しかし、その専門家は不足しており、育成を急がないといけません。

経済効果を優先するあまりに、観光を前のめりで推し進めるようでは困ります。

目を世界に移すと、戦後に観光の大衆化が始まり、1970年代に入ると観光客増大による固有文化の崩壊、文化の商品化、土着文化の西洋化が問題視されるようになりました。そうした中で、90年代にエコツーリズムなど多様化が進むなど観光の概念が急速に変わりました。

国連の世界観光機関（UNWTO）は「世界観光倫理憲章」を1999年の総会で決議し、「持続可能な観光」に向けた努力目標を掲げました。さらに国連教育科学文化機関（UNESCO）は「持続可能な観光プログラム」を示しました。この中に「地域社会に役立つ観光」「地域の人びとが観光産業に参加し恩恵を受ける」「人と社会の相互理解に貢献する観光」「観光収益は文化遺産の保護費用に充てる」などがうたわれました。

## 観光の意義を考える

- ・観光は「交流と対話の扉」
- ・観光する権利

UNESCOのイリーナ・ボコバ事務局長は声明で「観光は異文化間の交流と対話の扉」と述べ、「無知と偏見の障壁を打ち破る絶好の機会となる」と続けています。

戦争や差別に対し、観光が平和に寄与するのを期待しての言葉ですが、それにとどまらない意味をもつように思います。「交流と対話の扉」。地域と観光のあり方を考える時のキーワードです。交流と対話には、ゆっくりした時間とフランクな場が必要です。そ

してコミュニケーション力です。観光バスでやってきて、写真をたくさん撮って、お土産を買って帰る、だけの観光ではない、新しい観光が求められています。

先の世界観光倫理憲章は、「観光する権利」も掲げています。障害のある人や高齢の人たちが観光できるよう、バリアフリーにする必要があります。建物などハード面だけでなく、人の対応においてでもです。「対話」と「交流」を求める人なら、だれにでも扉を開けておきたいものです。

## 滋賀の地域観光のイメージを描いてみる

思いもよらないことです。わたしたちが暮らす地域に、よそから観光客が訪れてきます。歴史の古い滋賀ですから、文化財のお寺や古戦場がたくさんありますが、訪れる人は地域のお祭りや伝承とかに興味を持ち、青々とした田んぼや澄んだ小川の前でぼんやり佇んでいます。

どこがそんなにいいのかわかりませんが、旅の人は褒めてくれます。水がきれいとか、夜空の星が多いとか、時間がゆったり流れているとか。そんなこと当たり前だと思っていたけれど、旅の人たちが褒めてくれるので、だんだん誇らしくなってきました。

宿は、古い農家を再生しましたが、なるべく昔の良さを残しました。トイレとエアコンは付けたけど、五右衛門風呂にも入れるようにしました。喜んでくれました。この宿は、地域の者が手分けして運営しています。受け付けし、ベッドを整え、朝飯に地元で採れた野菜や果物、近江米のごはんを出します。

お客さんは地域で迎えらるる数に制限し、宿代は高めです。掃除や食事の用意、風呂などの世話を、女子衆（おなごし）がやり、男どもは力仕事をして、宿代のあがりから分配金をもらっています。難しい経営は、わたしらとNPOでつくった組合でやっています。

旅の人と一緒に田んぼの作業をしたり、山を案内したりしています。わたしらの話を面白がって聞いてくれますが、わたしらも旅の人の話を聞くのが楽しみです。知らないことが多くて、世界は広いなと思ったりします。

NPOの人たちが、わたしらのために頑張ってくれました。空き家の農家を再生するのに、実績のある建築業者を選んでくれたり、資金を集めるのに理解のある金融機関と交渉し、協力してもらったり。助成金が出る制度もよくご存じで、役所に掛け合ってくれました。人脈や経験がないとできません。

旅の人を受け入れるようになって、何が良かったかっていえば、この地域がいい所や、と思えたことです。生まれてこの方、そんなことなかったのに、旅の人に気づかされました。

若いもんは地域を離れて生活していますが、帰ってくると故郷がきれいになったとか、前より元気になったと言います。中にはUターンして、親の後を継いで、わたしらと一緒に旅人を迎える活動に参加してくれたりしています。工芸の仕事をするために、都会から若者が移住してきました。少子高齢化で、この地域はどうなるかと心配でしたが、希望が出てきました。新しい地域づくりが始まろうとしています。

その希望というのは、地域の良さに気づき、誇りに感じることで、自然に湧いてくるものでした。受け継がれてきた文化を見直すことで、地域の記憶というものに触れ、地域のアイデンティティを感じることになりました。旅人だけでなく、わたしたち自身が地域と対話するようになって気づいたことです。

そんな観光の姿が、思い浮かんできました。

## 提言とりまとめ経過

### ○ 情報発信部会（第1回）

びわこビジターズビューローから話題提供として、「日本遺産」を活かした秋からの取組についてお話しいただき、新規事業「文化で滋賀を元気に！シンポジウム」のテーマなどを話し合った。

日 時：6月28日(水) 18:00～20:00

会 場：旧大津公会堂 会議室（大津市）

・話題提供

「日本遺産 滋賀・びわ湖 水の文化ぐるっと博」

木村 俊晴 氏（(公社)びわこビジターズビューロー）

〈参加者〉

井上建夫（部会長）、音羽菊寿寿、加藤賢治、黒田秀子、田中健之、十倉良一、中村順一、馬場章、藤原和子、藤原昌樹、待文麻呂、村田三千雄、山本常秋、中西薫、竹村憲男

### ○ 文化で滋賀を元気に！シンポジウム

経済波及効果が期待される「観光」について、実践報告や意見交換を通して、地域の文化や歴史、まちづくりの観点からどうあるべきかを考えた。

日 時：12月24日(日) 14:00～16:00

会 場：ピアザ淡海 大会議室（大津市）

・テーマ：「地域文化をはぐくむ観光とは」

・講演：「文化／観光／まちづくり」

講師：金野 幸雄 氏（(一社)ノオト代表理事）

・パネルディスカッション

パネラー：金野 幸雄 氏

三宅 進 氏（針江生水の郷委員会会長）

宮崎 瑛圭 氏（とよさと快蔵プロジェクト）

林 俊介 氏（(公社)びわこビジターズビューロー）

コーディネーター：十倉 良一 幹事

### ○ 情報発信部会（第2回）

12月24日にピアザ淡海で開催したシンポジウム「地域文化をはぐくむ観光とは」をともに、平成30年2月の第8回総会での提言内容を議論した。

日時：平成30年1月22日(月) 18:00～20:00

会場：旧大津公会堂 会議室（大津市）

〈参加者〉

井上建夫（部会長）、伊庭貞一、十倉良一、中村順一、村田三千雄、堀真人、中西薫、瀨口潤二、竹村憲男